

住居跡番号	平面形	規模(柱間×短辺m)	床面積(m ²)	主軸方向	柱次	竪	貯蔵穴	竪	溝	高坪	土竹篋	物	蓋	その他	時期
Y-1	長方形	6.2×4.5	21.5	N-14°E	4	P1・P2中壁やや北	○	○	○	○	○	○	○	瓦	後彌生2段階
Y-2	方形	3.3×3.2	5.3	N-26°E	3	なし	なし	○	○	○	○	○	○		〃
Y-3	帯円形	(5.5)×5.4	(13.4)	N-13°E	4	なし	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-5	隅丸方形	6.8×5.7	(18.7)	N-77°W	3	2個所	○	○	○	○	○	○	○	瓦・灰	〃
Y-6	隅丸方形	9.2×7.3	69.7	N-16°E	1個所	なし	なし	○	○	○	○	○	○		〃
Y-7	隅丸方形	6.2×3.5	(12.4)	N-110°W	1個所	なし	なし	○	○	○	○	○	○	手捏	後彌生2段階
Y-8	長方形	7.7×5.7	37.3	N-89°W	4	2個所	なし	○	○	○	○	○	○	土製勾玉	〃
Y-9	方形	3.3×2.6	6.2	N-1°E	なし	なし	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-10	長方形	6.1×(3.8)	(12.3)	N-48°W	3	1個所	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-11	隅丸方形	(3.4)×4.8	(12.4)	N-17°W	なし	なし	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-12	隅丸方形	5.3×3.6	16.0	N-58°W	なし	なし	○	○	○	○	○	○	○		後彌生2段階
Y-13	隅丸方形	5.5×4.2	19.8	N-59°W	4	P1・P2中壁やや西	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-14	隅丸方形	7.1×6.8	36.7	N-76°W	4	P1・P2中壁やや東	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-15	隅丸方形	5.3×4.5	20.0	N-64°W	4	P1・P2中壁	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-17	長方形	5.0×4.0	17.6	N-24°W	4	なし	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-18	隅丸方形	8.6×6.8	51.3	N-74°W	4	なし	○	○	○	○	○	○	○	ミニチュア	〃
Y-19	隅丸方形	(5.1)×(3.6)	(10.7)	N-108°W	1	P1の西	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-20	隅丸方形	4.4×3.7	14.1	N-90°W	2	P1・P2中壁やや西	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-21	隅丸方形	(5.4)×4.1	(13.8)	N-45°W	3	P1・P2中壁やや北	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-22	隅丸方形	(6.2)×4.8	26.4	N-21°W	4	P1・P2中壁	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-23	隅丸方形	(7.2)×(6.3)	(34.4)	N-1°W	4	なし	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-24	隅丸方形	(7.7)×5.8	(29.8)	N-34°W	1	なし	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-25	隅丸方形	8.9×6.6	49.0	N-71°W	4	2個所	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-26	隅丸方形	8.1×6.3	45.7	N-32°W	3	なし	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-27	隅丸方形	(11.0)×7.4	(62.5)	N-21°W	4	2個所	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-28	隅丸方形	7.0×5.5	31.7	N-49°W	4	2個所	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-30	隅丸方形	8.0×(5.5)	(14.5)	N-7°W	2	P1の北東	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-31	方形	6.5×5.5	(22.7)	N-15°W	なし	なし	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-32	隅丸方形	5.7×4.6	22.3	N-23°E	4	P1・P2中壁やや北	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-33	隅丸方形	9.4×7.5	62.3	N-10°E	4	2個所	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-34	隅丸方形	6.6×5.1	36.9	N-15°E	4	P2寄り	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-35	隅丸方形	8.9×6.5	49.5	N-32°W	2	P1・P2中壁	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-37	隅丸方形	4.5×4.0	(9.3)	N-101°W	2	P2やや北寄り	○	○	○	○	○	○	○		〃
Y-38	隅丸方形	3.9×3.3	10.3	N-23°W	2	P2やや北寄り	○	○	○	○	○	○	○		〃

心に若干東西に振れる一群 (Y-9・23・30号住居跡)、北から西に15°~25°振れる一群 (Y-11・17・22・27・31・38号住居跡)、同じく32°~34°振れる (Y-24・26・35号住居跡)、同じく48°~49°振れる (Y-10・21・28号住居跡)、同じく58°~64°振れる (Y-12・15号住居跡)、同じく71°~77°振れる (Y-5・14・18・25号住居跡)、真西方向 (Y-8・25号住居跡)、西から南に9°~11°振れる (Y-13・37号住居跡)、同じく18°~20°振れる一群 (Y-7・19号住居跡) となっている。

そして、主軸方向が北から東に振れる一群の住居は、遺跡の東部分にまともって検出され、とりわけY-3・34・6号住居跡はほぼ等間隔に直線的に配置されている。また、北から西に15°~25°振れる住居跡6軒と、同じく32°~34°振れる3軒の住居跡も、ほぼ等間隔に直線的に配置されているなど、主軸方向をほぼ同一にするものは、ある一定の距離を保ちつつ構築されている。このことは、これらの住居は同時期に同一計画性のもと構築されていた傍証となろうか。

柱穴

主柱穴4本を基本としている。しかし、柱穴の数や配置が異なる住居も認められた。Y-2・6・9・12・24・31・38号住居跡の7軒である。このうち3軒 (Y-2・9・38号) の住居跡は小型住居である。また、白倉下原遺跡で確認された柱材として板材を使用していることが推定される住居跡も多かった。

入口施設

住居主軸線上で、炉と反対側の位置に出入口の梯子状の施設に付随するビットが検出されている。このビットは2個一組と単独で存在するものが認められた。主体となるのは2個一組のビットであるが、その軒数は13軒 (Y-1・5・13・14・17~20・22・23・25・27・32号住居跡) である。単独ビットの存在は不確定な住居もあるが6軒 (Y-8・9・15・23・24・34号住居跡) となり、出入口のビットが検出されなかった住居は4軒 (Y-2・6・28・38号住居跡) となった。白倉下原遺跡・天引向原遺跡では後期第1段階の住居はすべて2個一組のタイプ、第2段階では2個一組と単独のタイプが拮抗し、第3段階では単独のタイプが主流となる、という変遷過程が把握されている。当遺跡は第2段階であるが、2個一組のタイプがやや優位になっている。

炉

樽式期住居の炉の位置は、第1段階では主柱穴を結んだ線の内側に位置し、第2段階になると主柱穴を結んだ線上に炉が移動する。そして第3段階では主柱穴を結んだ線の外側に移動することが時間的推移としてほぼ把握されている。当遺跡例で見ると、主柱穴を結んだ線の内側に炉が認められる例は皆無であった。このことは第1段階の住居が存在していないことと合致している。主柱穴を結んだ線上に位置する炉は、12軒 (Y-1・5・8・13~15・20~22・27・34・35号住居跡) の住居で認められた。そして主柱穴を結んだ線の外側に位置している炉は、4軒 (Y-25・30・32・33号住居跡) の住居で認められ、炉が検出されなかった住居は7軒 (Y-2・3・9・12・17・23・26号住居跡) を数えた。

また、炉が2個所存在する住居は、5軒（Y-5・8・25・27・33号住居跡）である。副次的な炉と考えられるが、その住居内の位置は5軒とも出入口部左の支柱穴に近接して構築されている。

貯蔵穴

出入口ピットに近接して存在するピットは貯蔵穴と考えられる。これが検出されたのは11軒の住居である。その設置場所は、住居内から見て出入口ピットの左側に構築されている住居が10軒（Y-1・5・14・17・18・20・25・27・32・34号住居跡）、反対の右側に構築されている住居は1軒（Y-13号住居跡）であった。圧倒的に左側構築例が多い。また貯蔵穴を設置していない住居も9軒と数多かった。

遺物出土状況

土器の中には特異な出土状況が観察された。それは、支柱穴や貯蔵穴の中から完形土器が出土したことである。Y-1号住居跡の支柱穴P4上層から口縁部を一部欠損した壺が出土している。Y-14号住居跡の支柱穴P2内から完形の小型甕が、Y-23号住居跡の出入口部ピット(?)P7底面から完形の台付甕、Y-25号住居跡の支柱穴P4内から胴部下半分欠損の甕、Y-28号住居跡の支柱穴P4内から完形の甕2個体、Y-32号住居跡の貯蔵穴から脚部を欠損した高環が、それぞれ出土している。とりわけ、Y-1・14・28号住居跡の完形土器の出土は、住居の柱が抜き去られた後にピット内に意図的に配置されたものである。

出土遺物

現在、樽式土器の編年は飯島・若狭、佐藤らによる論文で3期区分が示されている。それによると各期は次の特徴をもっている。1期は壺・甕・高環を主体として構成され、他の器種は極めて少ない。組成的には中期栗林式系土器の系譜を強く引くが、篋描・縄文要素を消失させ、櫛描簾状文と波状文の組み合わせが定着する。2期は壺・甕・高環のほか、台付甕が多量に含まれるようになる。また片口・鉢・有孔鉢・蓋も多く出現し、器種が多様化する。壺・甕は長口縁化し、文様も定型化する。3期は2期の組成を引き継ぐが、壺・甕においては、複合口縁がかなり普遍化し、球脚化が進行する。文様帯が拡充し、櫛描文充填が盛行する。各器種外面篋磨きが頻繁となり、片口などの小型器種も磨きが一般的となる。

当遺跡で出土した土器群は、上記細分の基準を参考に考えると、後期の2期に該当するものと思われる。さらに、白倉下原・天引向原遺跡で指摘された後期第1段階に認められる櫛描文で特徴的な胴部に施された斜走あるいは格子状の平行線文が全く認められないこと、また第3段階の最大の特徴として、縄文施文の北武蔵地域の「吉ヶ谷式土器」・赤城南麓の「赤井戸式土器」等が色濃く加わってくるが、当遺跡では縄文施文の土器は一片も出土していない。これらの事ことから考えると3期までは確実に下らないことから、出土土器群は2期に属するものと判断される。また、Y-1号住居跡から出土した南東北系の土器(天王山式)の在り方等を含め、出土土器の詳細な分類・細分は後日に委ねたい。

〔4〕 長根安坪遺跡の周溝墓

友廣 哲也

1. はじめに

長根安坪遺跡では方形周溝墓14基が検出された。遺跡は弥生時代の集落が検出され、古墳時代初頭期にかかる住居跡は検出されていない。遺跡は吉井町西部に位置し、西に天引川を挟み天引狐崎遺跡が対岸に所在する。

2. 県内の周溝墓のあり方

まず県内の周溝墓のあり方を概観したい。県内で確認される周溝墓は弥生時代後期から古墳時代前期に及んでいる。近年弥生時代中期竜見町式に編入される四隅切れ周溝墓が一基確認された。弥生時代の周溝墓は円形周溝墓、四隅切れの周溝墓が認められ、方形区画の明瞭なものは希である。四隅切れ周溝墓は弥生時代中期から後期段階に存在しているが、前述のように微量である。また、弥生時代の周溝墓は県内渋川市有馬遺跡、高崎市新保遺跡、新保田中村前遺跡で検出され、形態は円形、だ円形がほとんどである。また有馬遺跡、新保遺跡の弥生時代の墓の総数とその内の周溝墓との存在率を計算したが、両遺跡ともに10%を下まわる結果がでた。この計算式は有馬遺跡では礎床墓86基、壱棺墓46基合計132基の墓域である。有馬遺跡の132基のうち周溝墓は11基存在する。この11基を墓総数の割合で出すと約8%になる。つまり壱棺墓や礎床墓のような墓制が弥生時代の墓制の主流であり、さらに付け加えれば、周溝墓の形態の特徴は、だ円形・円形である。礎床墓は木棺墓を基調とした櫛描文文化圏の特徴と考えられ、方形周溝墓とは大きく一線を画する墓制であると理解できる。ただし周溝墓という墓制は県内の弥生時代には存在し、特に四隅切れの周溝墓は前述のように弥生時代中期からあり、周溝墓という墓制自体は弥生時代から群馬の地に導入されたことは理解できる。他地域の調査の例を挙げると前橋市内堀遺跡で、前方後方形周溝墓群が検出された。内堀遺跡の調査に先立ち以前に北西に接する部分の上縄引遺跡を調査し円形周溝墓を検出した。その後同一墓域内で前方後方形周溝墓が確認され、円形周溝墓から古墳時代の方形周溝墓へとの変遷を確認することができた。ただし、円形周溝墓は弥生時代から古墳時代初頭期になっても認められ、この上縄引遺跡の円形周溝墓は古墳時代初頭に考えられるものである。いずれにしても大まかに考えると弥生時代の円形や円形の不定形の周溝墓から古墳時代になると方形周溝墓や前方後方形周溝墓のような墓制を導入していく。

整理すると次頁の表になる。

3. 長根安坪周溝墓のありかた

長根安坪では合計14基の周溝墓が検出されている。すべて方形周溝墓と考えられる。全周するもの5基を含み一辺の中央部が切れるものが4基存在している。(田中新史氏分類のB2類である。)出土遺物は余り多くはないが特に8号方形周溝墓出土の二重口縁甕は胴部下位に最大径をもつ。外面は磨きが施され東海東部系の影響が伺える。共伴する在地土器は外面に縄文が施され、赤井戸式土器であり、県内の古墳時代初期期の標相が強く認められる土器である。筆者の古墳時代第I期に編入される。

長根安坪遺跡は樽式の集落であり、住居跡からほとんど土師器の出土が認められず、周溝墓に葬られる時期の集落はやや離れた場所に所在するものと考えられる。長根安坪遺跡周溝墓出土土器の検討からも古墳時代初期期に位置づけられる遺構である。西に位置する天引狐崎遺跡でも周溝墓は検出されるが、墓に伴う時期の住居は検出されていない。両遺跡を含めた周辺地域は古墳時代に入り古地の移動を伴い、墓制の変質を迎えたものと考えられる。

引用・参考文献

- 田中新史「出現期古墳の理解と展望」
古代7号 1984年
友廣哲也「上野の古墳時代文化の受容」
古代探叢IV 1995年
友廣哲也「柳田文化圏の弥生時代終
末から古墳時代初期期の墓制」 古代
169号 1995年

	群馬県	周溝墓	畿内
	樽式土器	不定形の周溝墓・壺棺墓・礎床墓等	庄内古
古墳時代 第I期	樽式土器の変質がはじまる。	方形周溝墓が導入される。 前方後方形周溝墓が地域によっては出現する。弥生時代の円形やた円形周溝墓も共存する。 長根安坪遺跡周溝墓	庄内新
古墳時代 第II期	畿内系小型埴の出現	天引狐崎遺跡方形周溝墓	布留古

安坪古墳群の研究史

〔5〕 安坪古墳群の概要

石塚久則

安坪古墳群の本格的な調査は昭和10年8月に実施されている。この調査は昭和13年に刊行された群馬県史跡名勝天然記念物調査報告書5『上毛古墳綜覧』の基本の調査でもある。当時、群馬県から県下の学校・役場関係の上毛古墳綜覧作成の協力を依頼されていた豊園堂が関係した吉井町の調査の状況を自分が編集・発行していた『上毛及上毛人』の235号（昭和11年11月発行）に「吉井町古墳調査書」としてまとめている。

調査方法は1.古墳毎に番号をふる。2.従来の古墳の呼び名を記入。3.所在地を明記。4.地目・地籍。5.所有者の氏名。6.型式と階段の有無。7.高さと大きさ。8.山林・田畑などの現況。9.発掘の有無。10.出土品。11.古来の伝説など。12.管理状況。13.従来の調査資料・史跡指定の件。の13項目について調査の指示があり、古墳調査委員を昭和10年8月に吉井町町長、吉井町助役、吉井町小学校校長、吉井町小学校訓導7名の合計10名、指名した。そして池・片山・塩川・下長根・長根・本郷・矢田・吉井・小棚の9大字を各自が手分けして暑夏、10数日を費やして、測量に奔走されたことが記されている。町の最高責任者や警察が率先参加し、児童達も記載はされないうが相当数動員されており、歯痛誘導事件に端を発した汚名挽回の側面を持つこの調査の取組の異様さも垣間見える。

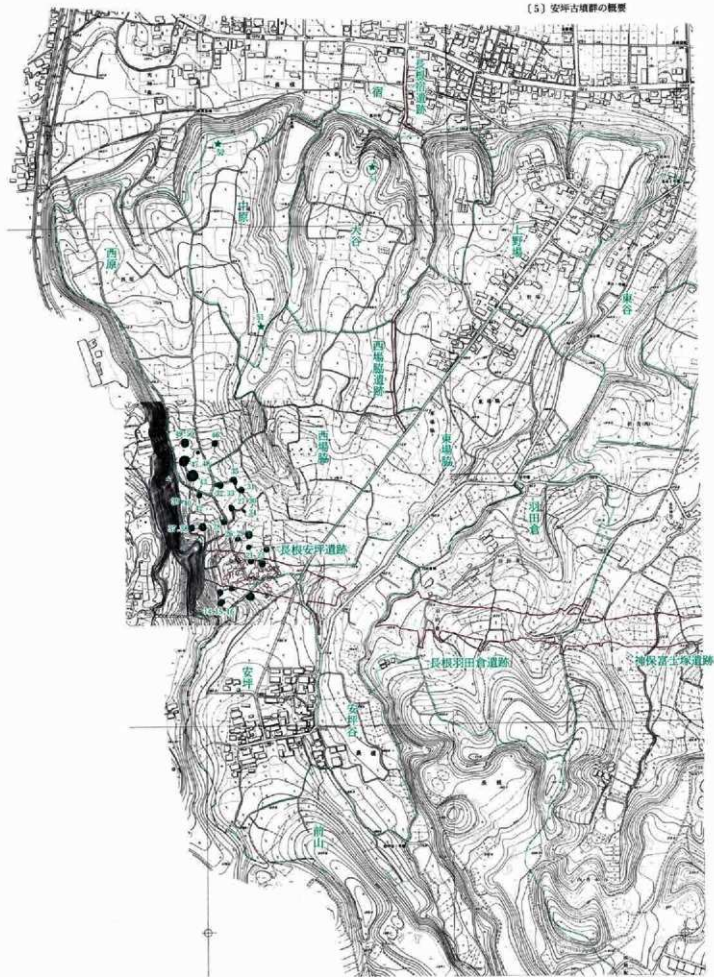
調査の成果は豊園堂の「吉井町古墳調査書」に纏めてある。先ず「多野郡吉井町古墳分布図」にすべての古墳の位置が記載してある。町内の古墳の総数は158基で池・61基、長根・44基、本郷・21基、吉井・7基、片山・7基、塩川・7基、小棚・5基、下長根・3基、矢田・3基と大字毎に別れる。けれど『上毛古墳綜覧』には161基と記載され、後日に池に3基の古墳が追加され64基になっている。

安坪古墳群の歴史的背景

この古墳の調査の精度はそれから60年後の平成7年の『吉井町遺跡地図』の詳細な追跡調査によって検証され確認されることになった。

それでは周辺地域の古墳の分布を『上毛古墳綜覧』を参考に確認し、安坪古墳群との関連を考えることにする。先ずこの地域は穏やかな南側の丘陵地と急峻に北側からせまる丘陵地の中央を西から東に流下する鍋川が走る。この河川に南の丘陵から中小河川が南から北へ合流する。安坪古墳群の東側には大沢川が走る。この川の上流部の左右の岸には塩古墳群が、中流域の左岸には神保古墳群が、右岸には多胡古墳群が分布している。下流、鍋川合流地域の左岸には本郷古墳群、右岸には塩川古墳群が分布している。総数215基を数え、鍋川流域最大の古墳群を形成している。安坪古墳群の西側には雄川が走りさらにその西側には下川が平行して鍋川に合流している。この両河川の中流域の丘陵上には善慶寺古墳群が、下流の鍋川合流地域一帯には小古墳群が散在する。原田籬古墳群、上田籬古墳群、下田籬古墳群、二日市古墳群、塚原古墳群、鹿島古墳

〔5〕安坪古墳群の概要



群、大山古墳群である。そして大型の前方後円墳の福島神明塚古墳、笹森稲荷古墳が盤踞している。この大古墳の対岸に祭祀遺跡の久保遺跡がある。

安坪古墳群を含む遺跡の分布は4本の河川の合流地域である。東から天引川、三途川、白倉川、庭谷川である。白倉川と庭谷川が上流で合流し、下流で三途川に合流し、鍋川の合流付近で天引川に合流して一本の川になる。この地域の古墳群の分布は少ない。先ず天引川と白倉川の上流の丘陵上には中原古墳、天引古墳群がある。中流域の天引川右岸の丘陵上に本古墳群である安坪古墳群が分布している。下流の鍋川の合流付近では小棚古墳群、片山古墳群がある。

この地域の古墳時代の墳墓の歴史のなかでの安坪古墳群の形成過程を概観しておくことにする。まず最古の古墳は安坪古墳群から北へ700mの距離に位置する恩行寺裏山古墳である。周辺の水田面との比高差は20mの北方に開けて周囲を望む。戴頭円錐形を呈する直径約40mの円墳で上毛古墳総覧には埴輪の出土を記録するが墳形と立地、古式土師器の出土から4世紀と考えられている。次は下流の鍋川の合流付近の片山1号墳が5世紀の前半で続く。粘土槨を主体部に持つ直径約30mの円墳で石製模造品・鉄器類・倣製鏡が出土している。この後、この地域には継続する古墳は確認されていない。むしろ西側の雄川と下川の鍋川の合流地域に墳長75mの前方後円墳、福島神明塚を盟主に統合されると考えられる。6世紀前半のこの周辺での首長墓は確認されていない。ふたたび、6世紀後半になると雄川と下川の鍋川合流地域に鍋川流域最大規模の、墳長106mを測る前方後円墳、笹森稲荷古墳が出現する。

安坪古墳群の構造

6世紀後半の同時期、この巨大古墳を西北西3kmの距離に望む安坪の丘陵縁辺部に安坪古墳群の形成が始まる。安坪古墳群の高さは標高180mを最高点に四方に下り標高175mまでの比高差5mの高さに取まる。分布は東西160m、南北360mの約500mの範囲である。古墳の総数は45基(上毛古墳総覧の吉井町11号墳～50号墳と今回の調査で検出した上毛古墳総覧漏れ5基)である。古墳の規模の計測は墳丘葺石の基部までの距離ではなく基壇(基段)を含む周囲の内側までの直径で表した。先ず6m～12mまでの墳丘径は上毛古墳総覧に記載の数値を使用している。6mは45号墳、7mは19号墳(安坪古墳群7号墳)・39号墳・44号墳、8mは14号墳・18号墳(安坪古墳群13号墳)・30号墳・34号墳、9mは28号墳・31号墳・33号墳・38号墳・46号墳、10mは25号墳・26号墳・27号墳・32号墳・35号墳・40号墳、11mは16号墳(安坪古墳群5号墳)・21号墳・36号墳・42号墳、12mは50号墳である。13m～17mの墳丘径は発掘調査の計測値が多い。13mは23号墳・安坪古墳群15号墳、14mは15号墳・24号墳(安坪古墳群11号墳)・47号墳・安坪古墳群6号墳、15mは41号墳・安坪古墳群14号墳、16mは11号墳(安坪古墳群2号墳)・12号墳(安坪古墳群1号墳)・17号墳(安坪古墳群9号墳)・20号墳(安坪古墳群3号墳)・安坪古墳群10号墳、17mは22号墳(安坪古墳群12号墳)・29号墳・安坪古墳群8号墳である。17m～26mは測量図からの復元径である。17mは22号墳・29号墳、19mは37号墳、20mは13号墳(安坪古墳群4号

墳)・49号墳、24mは43号墳、26mは48号墳である。最大規模の古墳と考えた43号墳・48号墳は分布域の北側の標高の低い位置にあるが周囲の古墳分布との間に大きな隔たりは感じられない。

各古墳の主体部は横穴式石室と考えてよい。発掘調査された古墳のうち比較的遺存の良好な11号墳や20号墳でも天井の構築方法や石室前庭構造をあきらかにすることができなかった。

埴輪を伴う古墳は14号墳・20号墳・23号墳・25号墳・27号墳・31号墳・36号墳・37号墳・38号墳・40号墳・42号墳・43号墳である。また発掘調査された古墳からも断片的ではあるが埴輪片の出土がある。11号墳と24号墳である。埴輪の樹立した周辺古墳からの流入ともみられる。

埴輪の表面採集、または出土の古墳は安坪古墳群45基のうちの14基を数え、約3基に1基の割合に埴輪を樹立していることになる。埴輪樹立の古墳は古墳群全体に散在するかのようで、集中はしない。

出土遺物の組成

墳丘の崩壊や石室内からの出土遺物は破損がひどく、出土遺物が完全に残っていた古墳はなかった。けれど今回、発掘調査された安坪古墳群のうちの15基は墳丘上に埴輪を樹立したものが少なく、墳丘築造の時期が埴輪消失以降と考えられることから調査した古墳の副葬品の組成を概観しておきたい。

先ず墳丘上に樹立した須恵器の大型の甕は4基の古墳から出土している。また、前庭、または石室内に副葬した須恵器には付付長頸壺、提瓶、平瓶が出土しており器形や製作技法は多様である。武器には大刀、鉄鏃が出土している。短頸、長頸鏃とも藤箆を持つ。装身具には耳環がある。11号墳からは3点、20号墳からは4点出土しており、複数の埋葬が考えられる。また紺青色のガラス玉が出土している。いずれも7世紀代の古墳の副葬品に共通してみられる傾向であるが馬具の出土がみられないことは後世の擾乱によるものであろうか。

飾り大刀と安坪古墳群

本古墳群を特徴づける出土遺物がある。平成8年、安坪古墳群の南側の先端の未調査部分を地元、吉井町教育委員会が発掘調査した。5基の古墳のうちの一つ、16号古墳から金銅装半鳳頭大刀が出土した。この「装飾付大刀」とも呼ばれる飾られた大刀は北は岩手県、南は長崎県まで、広く後期の古墳から出土している。全国の古墳からの出土一覧をみると群馬県、千葉県が15基、奈良県と鳥取県が14基と続き、本県からの出土例が全国でも最多であることが解る。(1996 『金の大刀と銀の大刀』近つ飛鳥博物館)

当然、未調査、遺物の遺存度も考慮に入れなければならないが、鏑の谷では最近の出土例の平井地区1号古墳からの2振りの装飾付大刀が管見に挙がる程度である。本古墳群でも特別に目立つ古墳からの出土でもなく、県内の奥原古墳群からの出土例も取り立てて大きな古墳からの出土でもない。装飾付大刀が氏の長に立つ地位の人物、または軍事に関係する人物と考えると、継続的に埋葬される被葬者のある段階での身分表象と古墳築造時の郷または里という小地域内での力関係は別のものなのかもしれない。

〔6〕古墳時代から平安時代の集落について

長根安坪遺跡では、古墳時代の住居跡から平安時代の住居跡が総計50軒検出された。その時期別内訳は、4世紀代の住居跡1軒、6世紀前半の住居跡3軒、6世紀後半の住居跡15軒、7世紀前半の住居跡2軒、7世紀後半の住居跡1軒、8世紀前半の住居跡6軒、8世紀後半の住居跡2軒、9世紀前半の住居跡8軒、9世紀後半の住居跡6軒、10世紀前半の住居跡1軒である。この他に時期不明の住居跡は5軒を数えた。

4世紀代の住居跡(H-40住)1軒は、遺跡の東端、安坪川に望む標高175mの所に構築されている。平面形は方形を呈し、地床炉をともなっている。発掘区からは同時期の住居跡はこれ以外全く検出されていない。遺跡中央部から西端部にかけて検出された方形周溝墓とかかわる住居跡であろう。4世紀代の住居跡は安坪川を隔てて隣接する長根羽田倉遺跡からも2軒検出されている。2軒とも方形を呈し、地床炉をともなっている。遺跡の最西端に構築されており、その在り方は共通している。

5世紀代の住居跡は検出されていない。

6世紀前半になると3軒の住居が構築されている。H-37・42・51号住居跡である。H-37号住居跡は完掘されていないため詳細は不明であるが、他の2軒の住居跡は、方形もしくは正方形のプランを呈し、カマドを東壁の中央やや南に構築している。カマドやその周辺からは類例の非常に少ない木葉型の坏が出土している。H-51号住居跡は8号墳周堀と接しているが、8号墳築造以前の住居跡である。この時期、長根羽田倉遺跡では住居15軒が存在し滑石製模造品の製作が行われているが、当遺跡ではかかる事例は確認されていない。

6世紀後半になると、住居が急激に増加している。H-1~5・14・24・25・27・29・32・36・41・50・48号住居跡である。検出された15軒の住居跡は、いずれも正方形もしくは方形プランを呈しているが、規模において2種類の住居が認められた。床面積が30㎡を超える住居跡7軒と10㎡代の住居跡5軒である。またカマドの構築においても2種類認められる。北壁に構築

菊池 実

されるカマドと、東壁に構築されるカマドである。東壁にカマドを持つH-27号住居跡と北壁にカマドを持つH-41号住居跡の距離は約1.5m、またH-41号住居跡とH-50号住居跡との距離も約1.5mであり、少なくともH-41号住居跡と他2軒の住居跡は同時存在の可能性は考えられない。また、H-25号住居跡は8号墳周堀と接しているが、8号墳築造以前の住居跡である。

7世紀前半では2軒の住居、H-28・43号住居が構築されている。前代から比べると極端な減少をしめているが、これは6世紀後半から築造されている古墳群の存在が集落の占地変更を余儀なくしていったものであろう。この時期、長根羽田倉遺跡では25軒の住居が構築され最も大きな集落の時期となっている。

7世紀後半では1軒の住居(H-34号住居跡)が構築されているのみで、集落は古墳群の北東方向に展開している可能性が高い。

8世紀前半になると住居も6軒(H-9・10・15・17・21・33号住居跡)と前代に比べると増加している。最東端の古墳から約40mの距離をおいて、その東側に集落が営まれている。

8世紀後半は2軒(H-20・23号住居跡)と減少している。この時期、長根羽田倉遺跡の西側台地も1軒の住居が存在するのみである。

9世紀前半になると8軒の住居(H-6・13・16・18・26・31・45・47号住居跡)が構築されている。前代に比べて増加している。古墳群から約30mの距離において集落が営まれている。住居は長方形・方形を呈し、床面積も10㎡代と小型化し、カマドはすべて東壁に構築されている。また、床面から柱穴は検出されていない。この時期、長根羽田倉遺跡では住居跡は検出されていない。

9世紀後半は6軒の住居(H-7・8・11・12・35・38・39号住居跡)が構築され、前代とほぼ同規模な集落となっている。住居構造も前代とほぼ同一である。

10世紀前半になると1軒の住居(H-39号住居跡)が構築されているだけである。

古墳時代～平安時代の住居跡一覧表

住居跡番号	平面形	規模(長さ×短辺m)	床面積(m ²)	主軸方向	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期
H-40	方形	4.5×4.4	16.0	N-28°-W	2	P1・P2中間やや北	なし	4世紀
H-37		(2.2×1.6)	(1.6)				○	6世紀前半
H-42	方形	4.6×4.3	18.2	N-68°-E	4	東壁中央やや南	○	〃
H-51	正方形	6.9×6.9	44.8	N-84°-E	4	東壁中央やや南	○	〃
H-1	正方形	6.4×6.1	33.9	N-19°-W	4	北壁中央	○	6世紀後半
H-2	正方形	6.8×6.4	34.3	N-2°-W	5	北壁中央やや東	○	〃
H-3	正方形	6.4×6.3	35.1	N-30°-W	4	北壁中央	○	〃
H-4	正方形	5.6×5.4	30.2	N-8°-W	4	北壁中央	○	〃
H-5	正方形	4.0×3.9	13.9	N-80°-E	4	東壁中央	○	〃
H-14	方形	5.3×5.0	(22.2)	N-18°-W	4	北壁中央	○	〃
H-24	方形	7.5×6.7	(32.7)		3			〃
H-25	正方形	7.2×7.2	48.5	N-72°-E	4	東壁中央	○	〃
H-27	正方形	3.4×3.4	9.9	N-103°-E	壁外	東壁中央	○	〃
H-29	方形	4.5×4.1	15.8	N-9°-W	4	北壁中央やや東	○	〃
H-32		(5.5×4.5)	(15.7)					〃
H-36	方形	7.5×6.9	45.5	N-15°-W	4	北壁中央	○	〃
H-41	正方形	4.0×4.0	14.7	N-19°-W	壁外?	北壁中央	○	〃
H-50	方形	3.9×3.5	11.6	N-83°-E	4	東壁中央やや南	○	〃
H-48		5.1×(2.7)	(10.9)		2			〃
H-28	長方形	5.2×3.3	16.7	N-109°-E	なし	東壁南	なし	7世紀前半
H-43	方形	6.8×6.0	36.0	N-10°-W	4	北壁	○	〃
H-34	方形	4.7×4.5	19.9	N-11°-W	3	北壁中央やや東	○	7世紀後半
H-9		3.8×(1.2)	(3.5)	N-24°-E		北壁		8世紀前半
H-10		(3.4×3.0)	(5.5)					〃
H-15	方形	4.2×3.9	14.4					〃
H-17	方形	4.7×4.5	18.5	N-22°-W	3	北壁中央	○	〃
H-21		(3.5×2.0)	(3.2)					〃
H-33		(5.7×3.7)	(13.0)			北西部・石組み		〃
H-20	方形	6.1×5.5	28.8	N-11°-W		北壁中央・石組み		8世紀後半
H-23		(2.5×1.0)	(0.8)					〃
H-6	長方形	3.0×2.7	7.1	N-95°-E	なし	東壁中央やや南	なし	9世紀前半
H-13	方形	3.2×3.0	8.8	N-90°-E	なし	東壁南	なし	〃
H-16	方形	3.8×3.7	12.4	N-89°-E	なし	東壁中央やや南	なし	〃
H-18	方形	3.2×2.9	7.6	N-89°-E	なし	東壁中央	○	〃
H-26		(4.7×2.3)	(9.6)					〃
H-31	長方形	4.8×4.2	16.3	N-87°-E	なし	東壁中央やや南	○	〃
H-45	長方形	4.0×3.1	10.5					〃
H-47		4.2×(1.9)	(6.2)					〃
H-7	長方形	5.6×4.5	22.3	N-101°-E	なし	東壁南	○	9世紀後半
H-8	方形	4.3×3.9	15.5	N-80°-E	なし	東壁南	なし	〃
H-11		(4.2×3.4)	(11.6)	N-83°-E	なし	東壁中央	○	〃
H-12	長方形	3.8×2.7	9.1	N-85°-E	なし	東壁中央	なし	〃
H-35	方形	4.6×3.9	15.8	N-82°-E	なし	東壁中央やや東	なし	〃
H-38	方形	4.0×3.2	11.5	N-80°-E	なし	東壁中央	なし	〃
H-39	方形	3.7×3.1	10.9	N-93°-E	なし	東壁中央やや南	なし	10世紀前半
H-19	方形	3.3×2.9	8.4	N-86°-E	なし	東壁中央やや南	○	不明(9世紀前半以前)
H-22		(2.5×1.0)	(1.1)					〃
H-30		(5.7×1.2)	(4.3)					〃(4号墳下)
H-46		(2.9×2.1)	(4.9)					〃
H-49	正方形	6.9×6.5	(13.6)					〃(8世紀後半?)

報告書抄録

フリガナ	ナガネアヅボ
書名	長根安坪遺跡
副書名	関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻	第38集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第210集
編著者名	菊池 実
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村下箱田784-2
発行年	1997年1月

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ナガネアヅボ 長根安坪	タノグンヨシイマチ 多野郡吉井町 ナガネ 長根	103632		36°14'16"	138°57'32"	19880118	17,538m ²	高速道路 建設
				}	}	}		
				36°14'19"	138°57'46"	19890302		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
長根安坪	集落・墓地	縄文時代中期	竪穴住居跡	12	土器・石器	列石下土坑 脂肪酸分析 実施
			弧状列石・配石	2		
			屋外埋設土器	3		
			土坑	118		
	集落	弥生時代後期 // 中期	竪穴住居跡	34	土器・石器	天王山式土 器出土
墓地	古墳時代	方形周溝墓	14	土器		
古墳		15	耳環・ガラス玉			
集落	古墳・奈良・平安 時代	竪穴住居跡	49	土器		
		掘立柱建物跡	14			
生産・墓地	中・近世、時期不明	畠・土坑				

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告書 第219集

長根安坪遺跡

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第38集

1997(平成9)年1月16日 印刷

1997(平成9)年1月31日 発行

編集／群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北構村大字下箱田784-2
電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北構村大字下箱田784-2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社